いとおしさと愛着～未来の「ものづくり」を考える～

第13回環境シンポジウム『いとおしさと愛着～未来の「ものづくり」を考える～』（公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団主催）が11月17日、大阪市内で開催された。2025年は大阪・関西万博が開かれ、ものづくりと深い関わりを持つ「民藝」活動が100年を迎えた年であることを踏まえ、環境に配慮した持続可能なものづくりをテーマに活発な意見交換と情報発信が行われた。

開会のあいさつ

公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団　理事長
株式会社長谷工コーポレーション副社長執行役員

岡橋　達哉氏

さて、先月大阪・関西万博が終わりました。皆さま方にとって、万博はいかがでしたでしょうか。当初ネガティブな報道が先行しましたが、夏以降は連日大盛況となり、開催を支援してきた経済界の一員として安堵しているところです。人気を呼んだ公式キャラクター「ミャクミャク」グッズは万博終了後も大人気で経済効果は800億円と言われています。

万博は未来社会の実験場、建物や技術だけではなくそこに込められた志や挑戦がありました。日本には古から続くものづくり精神があり、良いものを一寧に作るだけではなく失敗を恐れず、新しい技術や価値を生み出し未来へなげる姿勢があります。また私たちが生み出す「もの」は未来へのメッセージでもあります。そして万博が終わった後に残るべきものは、ものづくりを通じて培われた「挑戦する文化」と「未来を信じる力」です。本日のシンポジウムは、そのような「未来へ向けたものづくり」をテーマとさせていただきます。

基調講演①「いまなぜ民藝か」

明治大学理工学部　准教授

鞍田　崇氏

2025年は日本の近現代社会にとって次のフェーズを探るターニングポイントとなる可能性があります。これまではゴールにいかに早く到達するかが重視されてきましたが、そこにはプロセスが抜け落ちていました。次のフェーズではプロセスと時間を味わうことに経済的価値が見いだされるようになるかもしれません。現在は、スマートフォンがあれば多くのことが賄えるようになっており、以前のようにものを作らなくても済む時代になっています。何をどう作るのかをこれまで以上にセンシティブに考えなければなりません。「民藝」の中には、これからの時代のものづくりに必要な「うるおい」を考えていく上でのヒントが宿っています。

100年の歴史を持つ「民藝」には これからのものづくりに必要な「うるおい」を考える上でのヒントが宿っている

『民藝』という言葉は100年前の1925年に、宗教哲学者の柳宗悦を中心とする30代の若手芸術家たちが当時関心を持っていた民衆的工芸をベースに新語として生み出したとされています。柳は、粗雑な日用道具である「下手物」には実用性である「物への用」と美しさとなる「心への用」が宿っていると語っています。また、「物への用」と「心への用」の深い部分にある基層とするものを「全き用」と呼んでいました。また、柳をはじめとする民藝に携わった芸術家たちは民藝品について「作られるのではなく生まれるもの」と語っています。

柳が初代館長を務めた日本民藝館の5代目館長を務めるプロダクトデザイナーの深澤直人氏は民藝品に備わる使い勝手の良さと美しさを踏まえながら、「その上に立ちえる何かを強く感じた」と言及しています。その何かとは「全き用」から醸し出されるものであり、人間の合理的思考では計り知れない豊かな「うるおい」そのものを示しているように思います。

柳は、親しさすなわちインティマシーそのものが工芸の美の本質であるとも解いています。一方でその親しさは、生活の厳しさ、生きることの切なさからもたらされる悲しさと表裏一体を成すものでした。民藝品は生活に寄り添うものだからこそ一層の親しみと温かさを感じたのかもしれません。私自身、京都の骨董街で見つけた刺子足袋を手に取った際、その使い古された佇まいに魅せられた経験を持っています。暮らしの中で使われてきたからこその味感があり、そこにいとおしさを感じました。

古語で「いとほし」には「労の字があてがわれ、良い面ばかりでなくつらいことも含めて受け止めるという意味が込められていました。自然や生命との共感を考えるあたりに、形あるものはいつかなくなるという現実をもう一度われわれは見つめ直さなければならないのかもしれません。

基調講演②「綺麗な地球と漆文化を次世代に」

株式会社堤淺吉漆店　代表取締役社長

堤　卓也氏

明治42年に京都で創業し百余年、「漆を一滴も無駄にしない」初代、堤淺吉の想いを継ぎ、変わりゆく時代の中で、漆の新たな可能性を開きながら漆文化を未来へつないでいきたいと考えています。

漆の樹液は15年程かけて育てた漆の木から採取します。樹液の性質は採取する季節や人によって異なり、さまざまな樹液の特徴をいかして粘り、乾き、つやを作り出しています。湿度や温度の影響を受けるので気候には振り回されますが面白い仕事です。

漆は丈夫で210度の熱に耐え、防水性、抗菌性、耐薬品性に優れ、接着性も強く文化財の修復にも使われています。漆は諸説ありますが約1万年前の縄文時代から日本人の暮らしの中で常に使われてきました。水分を保った生き固まるしっとりとした質感が、ものを大事にする日本人の感性を育んできたのかもしれません。

日本の漆は1978年には500トン使用されていましたが、2020年には23トンに落ち込んでいます。現在国内で使用されている国産漆の割合は5%程度に落ち込み、漆産業そのものが衰退していきたいと考えています。

2016年に、漆のある暮らしを子供たちにつなぐ取り組みとして「うるしのいっぱ」をスタートしました。漆の魅力や漆産業に携わっている人たちの姿を冊子や映像を通じて発信しています。世代や国を超えて漆の素材としての価値を伝えることを目指しています。

身の周りの物は使い込むことで愛着が湧いてきます。長く使ってもらえる漆を使った100%自然素材のサーフボードを制作して販売しています。漆の塗膜は単に美しいだけでなく、親水性の高さから表面に水の膜が広がりやすいので摩擦が軽減され、海面での滑走性を向上させることができるんです。

また、お椀に関連したプロジェクトとして、京都の漆器の技術と文化を若手職人に継承するとともに仕事を生み出す仕組みを作ろうとされた失われた「アサギ椀」の復活に取り組んでいます。工房を作って循環型の地産地消の仕組みを整えています。

植物由来の再生可能な樹脂、PLAを素材に現代テクノロジーの3Dプリンターを使ってさまざまな器を作り、漆で仕上げる新しい発想のものづくりや、漆の木を使った草木染めにも挑戦しています。デザイナー、アーティスト、研究者など異なった分野の専門家と共同で新たな素材や技術の調査、実験を行う「アンド・リサーチ・プロジェクト」も進めています。さまざまな事業を展開して漆の用途を広げ、漆と工芸の結びつきを通じて人々の輪を作り、生活を豊かにしていきたいと考えています。

漆は日本の生活文化と深い関わりを持つ天然素材 事業を通じてその価値を未来につなぐ

事業紹介

「ふたつのM―2018～2021河西実氏の事業から―」

財団は2018年4月から約3年半にわたり河西実氏（フェア・プラス）へ助成し、その後の活動状況について報告を行った。

活動の舞台となるフィリピン中部のパナイ島マリナオ村サンラモン集落では、多くの人がアバカという木の繊維を素材にサンダルや日用品を作り暮らしている。また、マクラメ編みという伝統の編み方を母から娘へ何代にもわたって伝えてきた。河西氏は現地パートナーと共に、マクラメ編みで作られた製品の高付加価値化に着手。日本などの海外市場への販路を開拓することで現地の仲介業者に安く買いたたかれていた状況の改善に取り組んだ。

村人への環境教育として政府の専門家を招聘して自然環境保護の研修会の実施やデザイナーを招聘して商品開発の指導を行い、先進国市場への広報活動も積極的に取り組んだ。この間、自然災害やコロナ禍で中断を余儀なくされたが、河西氏と現地の方の努力もあり、何とか助成事業は終了となった。

その後も継続的に事業を進められていたが、2023年9月河西氏が逝去されフェア・プラスも解散されたと連絡を受けた。しかし、河西氏の遺志を受け継いだデザイナーの井潭葉子さんとプロデューサーの古谷尚子さんがM＋abaca「ふたつのM」（マリナオ村のMと河西実＝みのる＝のM）として事業を継続しており、現在ホームページなどによるネット販売や展覧会への出品など様々な活動を展開している。